

[実践記録]

大学生の武道に関するイメージに関する一考察

—「剣道」の授業における学生のレポートから—

国 吉 恵 一
藤 原 靖 浩

要 旨

本研究では、大学生の武道に関するイメージを明らかにするため、剣道の授業における学生に自由記述のレポートを記入させた。その際、すべての質問を学生の自由記述で回答を求め、より具体的なイメージを把握することを目指した。初回の授業と最後の授業で記入してもらった自由記述の結果についてテキストマイニングを用いて分析を行い、頻出語の整理と共起ネットワークの作成を行った。そこから、剣道を通して、学生たちのイメージがどのように変化したかを4つの質問から確認することが重要であると考えている。

1. 問題と目的

現在、剣道の世界では、青少年の剣道人口が減少していると言われている。長谷川ら(2021)の指摘によれば、2003年には59,382名であった全国高等学校体育連盟が公開している剣道部の部員数は、2019年には38,435名となっている。そこでは、弓道等の人口減少も指摘されてはいるものの、その数は剣道と比較しても非常に少なくなっており、卓球等の競技ではむしろ増加傾向すら見られるとされていた¹⁾。この点については、大塚(1992)も、高校生の剣道部員の減少は、人口が減少する以前から起きており、人口が自然に減少したことだけが原因とは考えにくいことが指摘されていた²⁾。つまり、剣道人口の減少には、人口減少以外のさまざまな要因があり、その理由を明らかにすることが1つの課題とされてきたのである。

こうした剣道が抱える課題に反して、学校教育では移行期間を経た2012年度から中学校の保健体育科において武道の領域が1、2年生で必修化され、10年を迎えようとしている。これは、2006年に改正された教育基本法の「教育の目標」第二条の五にある「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」を背景に、武道の指導の充実や、日本固有の伝統や文化に触れる機会を増やすことが期待された結果である。この点について、中学校の保健体育科における剣道の教材開発を行った菊本ら(2022)は、「武道の根源は明らかに戦技であるが、天才的な人物の出現により芸道化され、実戦の役割から大きく開放されてからは、殊更、武芸とい

う文化的価値を有する技能の習得過程を手段とした人間形成の道として発展し位置付けられているところが特徴的である³⁾と述べている。このような大きな期待をかけられていた武道の授業ではあるが、実際に中学校の授業で必修化された武道については、さまざまな課題が指摘されてきた。特に、剣道の授業については、平田ら（2013）の指摘するように、指導者の不足、指導法の工夫や開発の不足、評価方法の未確立など、多くの課題が見られた⁴⁾。こうした課題に対して、近い将来、教員になる可能性のある、大学で教職課程を履修している学生、特に体育教員を目指す学生の剣道のイメージを把握し、具体的な指導に活かしていくことは重要な課題であると考えられる。

平田（2014）は、大学の教職課程で体育を専攻する学生 30 名を対象に剣道に対する意識のアンケート調査（5段階 32 項目）を実施し、学生の学習ニーズを把握することを目指した⁵⁾。

そこでは、指導する立場を想定した安全な指導法、剣道の基礎基本を身に付けようとする学生の姿が見られることが確認された。このようなデータを元にした大学の授業改善は、今後の教職課程においても重要な視点であり、そのためには剣道の授業を履修している大学生の剣道のイメージを把握し、大学生の実態に合わせた授業を行うことが重要だと考えられる。

剣道のイメージについての最近の研究では、新里ら（2021）の研究がある。新里らは、日本体育大学の剣道部員 235 名を対象に、剣道のイメージに関する調査を行い、剣道部員の多くは大学卒業後も剣道を続けたいと考えており、生涯スポーツとして剣道を捉えていることや、段位を取得する機会が剣道を問い直す機会になっていることを明らかにした⁶⁾。同じ年に、新里らは、剣道部の学生と一般学生のイメージの違いを明らかにするための比較研究を行っており、剣道部の学生が「理念」「礼儀」「伝統文化」「稽古」「修練」という 5 つの因子、一般の学生が「気合」「礼儀」「剣道人口」「ニオイ」「武道」という 5 つの因子がそれぞれ確認された⁷⁾。つまり、剣道部と一般学生の共通したイメージについては「礼儀」という点のみであったということである。この先行研究では、一般の学生と剣道部の学生のイメージのズレがあることが明確になった。しかしながら、小森ら（1993）をはじめとする因子分析を用いたイメージの構造の把握は、活動的、意志性などの広義に渡るイメージを理解するためには有用であるが、具体的な内容を捉えにくいという課題があった⁸⁾。そこで、本研究では、すべての質問に学生の自由記述で回答を求め、より具体的なイメージを把握することを目指した。

2. 京都産業大学における剣道の授業内容

京都産業大学における剣道の授業は「スポーツ科学実習 B」（剣道の科学）で実施されている。第 1 回はガイダンスを行い、第 2 回では竹刀を持って素振りを行う方法、すり足や踏み込み足などの足さばきをはじめとした剣道の基本的な動作を学ぶ。第 3 回からは剣道防具を実際に装着した活動を行う。未経験の初心者が多いため、剣道防具をつけた動きに慣れるところか

ら始めることが必要であり、数名の経験者に見本を示してもらい等の取り組みを行っている。第4回まで基本動作を学んだ後は、面、小手、胴の基本打ちの練習、小手面、小手胴などの基本打ちを組み合わせた二段技や、払い技の練習を行う。第9回からは相互の実践練習を行い、早い段階で初心者が有効打を打つことの難しさを体験させる。そこで、技の大切さを学生たちに実感させることで、学生が技を身につける動機付けを高めている。授業の最後には、審判を立てた実際の試合を行う。

3. 調査方法

1) 調査対象者

調査は、京都産業大学において剣道の授業を履修している学生23名を対象に実施された。

2) 調査内容と手続き

『『剣道』』について的小レポート(1)』『『剣道』』について的小レポート(2)』というプリントを用いて授業の最初(第1回)と最後(第15回)で、学生に自由記述の課題を出した。小レポート(1)では、「あなたは、なぜ剣道の授業を選択したのですか?」「あなたの剣道に対するイメージはどのようなものですか?」という2問に回答を求めた。小レポート(2)では、「授業を受ける前と後で剣道のイメージはどのように変化しましたか?」「大学で武道(剣道)を履修することにどのような意味があると思いますか?」という2問に回答を求めた。

4. 結果

回答の内容はテキストマイニングソフト(KH Coder)を用いて分析した。抽出する語句の最小出現数を2に設定し、分析を行った。

剣道経験については6名の学生が剣道を経験しており、中学校で武道の必修化があった学生ではあるものの、柔道等の経験はあるが、剣道の経験はない学生が多くいることが確認できた。

また、高校での授業選択でも剣道を選択した経験のある者はほとんどおらず、部活動で剣道部に入部していた、もしくは剣道の道場に通っていた経験があるといった者が2名であった。そのため、体育教員として、将来剣道を指導することになるという授業実践のイメージについては希薄な学生が多いのではないかと予想された。

1) 質問1「あなたはなぜ剣道の授業を選択したのですか?」における頻出語の特徴

表1に示したのは、23名からの回答の中で2回以上使用された言葉を抽出したものである。「先生になるために必要である」「選択授業として必要である」などの回答はあったものの、柔道等の選択肢もある中、剣道を選んだ学生たちであるため、興味が9回、身体を動かすためという理由が6回出現している。体育教師の資格取得を目指す学生たちであり、身体を動かすこ

とへの忌避感は少ないことが伺える。

表1:「剣道の授業を選択した理由」の頻出語

名詞		動詞		形容詞	
剣道	25	思う	17	少ない	2
興味	9	動かす	6	面白い	2
体	6	学ぶ	2	好き	2
授業	5	教わる	2		
選択	4				
経験	3				
履修	3				
必要	3				
受講	2				
スポーツ	3				
機会	2				
技術	2				
久しぶり	2				
警察官	2				
高校	2				
先生	2				
体育	2				
大学	2				

2) 質問1「あなたはなぜ剣道の授業を選択したのですか?」の共起ネットワーク

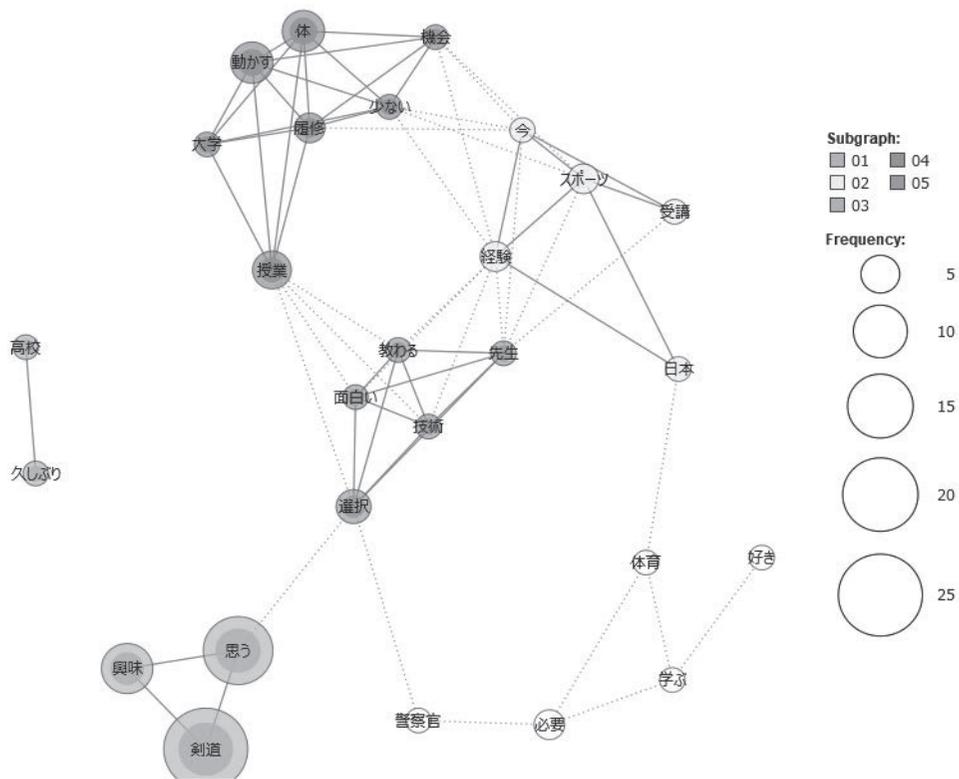


図1: 剣道の授業の選択理由についての共起ネットワーク

「体」「動かす」「少ない」「機会」「大学」などが結ばれていることから、大学では中学校や高等学校と異なり、授業で身体を動かす機会が少ないと考えている学生が多く、剣道などの授業が身体を動かす良い機会になっていることが伺える。高校時代に経験していた学生が6名履修しているが、大学では剣道部に所属しておらず、久しぶりに剣道に触れる学生がほとんどであった。また、「先生」「技術」「教わる」「面白い」「選択」からも分かるように、選択授業ではるものの、面白そうである、先生になるために技術を学びたいと考えている学生がいることが分かる。その他にも「興味」「剣道」「思う」が結ばれており、すでに興味関心を持った学生たちが履修していることが伺える。最後に「警察官」「必要」等が点線で結ばれていることから、教師ではないにせよ、剣道が将来の職業に必要であるという意識が伺える。

3) 質問2「あなたの剣道に対するイメージはどのようなものですか？」の頻出語の特徴

表2に示したのは、23名からの回答の中で2回以上使用された言葉を抽出したものである。第1回目のガイダンスで回答を求めたため、学生たちは竹刀にすら触れておらず、純粹にこれまで持ちえた剣道のイメージを回答していることが伺える。

学生たちは剣道をスポーツの一種ではあると捉えているものの、「礼儀」が6回、「作法」が3回、「精神」が2回出現している。これは、他のスポーツの種目と比べて剣道を特別なものとして認識している学生がいるのではないかとと思われる。ただ、「暑い」「痛い」「激しい」「臭い」「きつい」「しんどい」等、マイナスのイメージが先行している学生がいることが分かる。この点については、コロナ禍でマスクを着用した状態で面を装着しなければならなかったことで、より一層、初心者の学生に負担を感じさせたのではないかと考えられる。

表2:「剣道に対するイメージ」の頻出語

名詞		動詞		形容詞	
イメージ	20	思う	10	暑い	6
スポーツ	7	叩く	3	痛い	6
礼儀	6	学ぶ	2	激しい	2
武道	4	学べる	2	臭い	2
汗	4	戦う	2	重たい	2
作法	3	鍛える	2	きつい	2
道着	3			しんどい	2
剣道	2			すごい	2
精神	2				

4) 質問2「あなたの剣道に対するイメージはどのようなものですか？」の共起ネットワーク

ここでは、実際に剣道の練習を行う前の学生のイメージを示している(図2)。「精神」「鍛える」「日本」「スポーツ」が結ばれており、点線で「武道」「学ぶ」などが繋がっていることが分かる。剣道の練習を通して、日本古来の伝統や、精神を鍛えることができるというイメージを持っている学生がいることが確認できた。「礼儀」「作法」を学ぶことができると考えている学生が多いものの、「イメージ」と結ばれているのは「暑い」「汗」「重たい」「痛い」等であ

り、マイナスのイメージが強いことが伺える。剣道の授業は、第一にこのマイナスのイメージをいかにプラスに転換させることができるか、または、マイナスのイメージはあるもののプラスのイメージがそれらを上回ることが重要であると考えられる。

5) 質問3「授業を受ける前と後で剣道のイメージはどのように変化しましたか？」における頻出語の特徴

表3から分かる通り、名詞や動詞の文字数が増えており、15回の授業に学生たちが真剣に取り組んできた成果を感じられる点をまず評価しておきたい。初回のイメージでは出てこなかった「経験」「技」「習得」「足」等の名詞が出現しており、特に「技」の大切さ等について実践練習を通して感じてくれた様子を読み取ることができた。初回のイメージでは「叩く」という言葉で表現されていた竹刀の使い方が、「決まる」「打つ」「外す」といった剣道独自の用語に置き換わっていることは、非常に興味深い結果となった。また、「痛い」「暑い」等のマイナスな表現が消えることはなかったが、「楽しい」「凄い」等のプラスの表現が見られるようになったことは剣道のイメージが良い方向に向いたことを感じさせる。

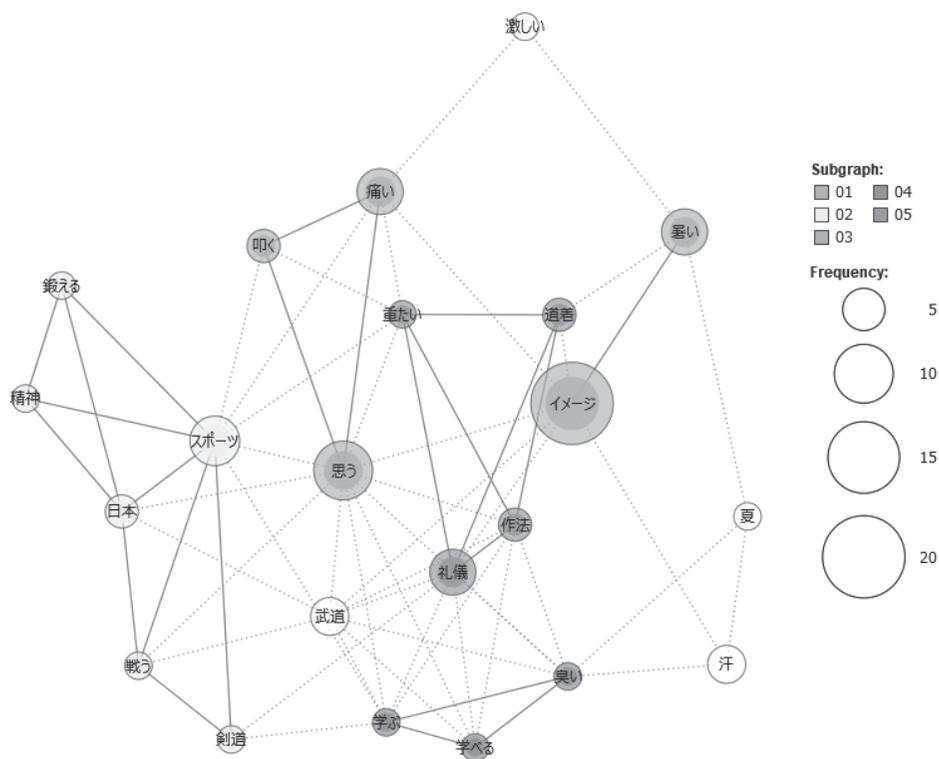


図2：剣道に対するイメージについての共起ネットワーク

表3：「剣道に対するイメージの変化」の頻出語

サ変名詞		動詞		形容詞	
イメージ	12	思う	11	楽しい	5
経験	7	する	10	痛い	5
技	7	できる	9	暑い	3
人	6	感じる	8	多い	3
試合	6	決まる	4	良い	3
授業	3	打つ	4	しんどい	3
習得	3	分かる	4	ない	3
練習	2	見る	3	強い	2
足	2	変わる	3	凄い	2
面	2	外す	2	怖い	2
		学ぶ	2		
		気が付く	2		
		近づく	2		
		取る	2		
		受ける	2		
		終わる	2		
		重ねる	2		
		出せる	2		
		知る	2		

6) 質問3「授業を受ける前と後で剣道のイメージはどのように変化しましたか？」の共起ネットワーク

剣道の授業をすべて終えた後の剣道へのイメージを示した図である。「人」「初心者」「楽しい」「色々」「習得」「学ぶ」「多い」などの言葉が出現していることで、初心者でも多くのことを学び、習得することができたと実感できていることが分かる。「経験」「感じる」が繋がっていることから、剣道の経験者の動き等を実際に見ることに加え、自分自身の技術が向上していくにつれて経験者との差を実感し、「見る」「良い」「動き」「分かる」「タイミング」のように目で見えた動きの良さを理解することができるようになったことが伺える。こうした技術の向上は「足」「気が付く」「終わる」「近づく」「凄い」という言葉からも感じられる。特に、「足」「気が付く」等の他の種目にはない剣道独自の動きや体さばきを理解しつつあることは評価すべき点であろう。こうした剣道の独自性に加えて、「技」「打つ」「複雑」等の言葉が見られたことから技を身に着けることで、剣道の奥深さを実感した学生もいたのではないかと思われる。

表 4：「大学で剣道を履修する意味」についての頻出語

名詞		動詞		形容詞	
礼儀	8	できる	23	新しい	3
スポーツ	6	思う	20	正しい	3
剣道	5	学ぶ	8	良い	3
精神	5	触れる	5	強い	2
大切	5	学ぶ	8		
機会	4	触れる	5		
武道	4	鍛える	3		
作法	3	知る	3		
自分	3	付ける	2		
身体	3				
意味	3				
運動	3				
経験	2				
生活	2				
履修	2				
基本	2				
高校生	2				
使い方	2				
社会	2				
世界	2				
大学	2				
中学生	2				
仲間	2				
文化	2				
きっかけ	2				

8) 質問4「大学で武道（剣道）を履修することにどのような意味があると思いますか？」についての共起ネットワーク

15回の授業が終了した後の自由記述を下に作成した共起ネットワークである。まず「礼」「生活」「大切」という言葉が繋がっている部分からは、剣道での学びが生活に生かされていくことが期待できる。さらに、「作法」「学ぶ」「礼儀」「思う」という言葉があることや、「経験」「使い方」「新しい」「世界」「身」「付ける」のような言葉があることから、剣道という新しい経験を通して、新たな成長を感じられることが期待されていると思われる。特に、「作法」や「礼儀」だけでなく「日本」「文化」「触れる」「精神」等の言葉が出ていることから、現代では礼儀を重んじる武道に触れる機会が少なくなったのではないかと考えられる。ここで最も興味深いことは、基礎的なことだけに留まることなく、実践的な授業をしているにも関わらず、礼儀の重要性が結果的に伝わっていることである。実践的な練習を行うことが、学生自身の成長につながり、礼儀や作法の重要性を高める結果になったのではないかと考えている。

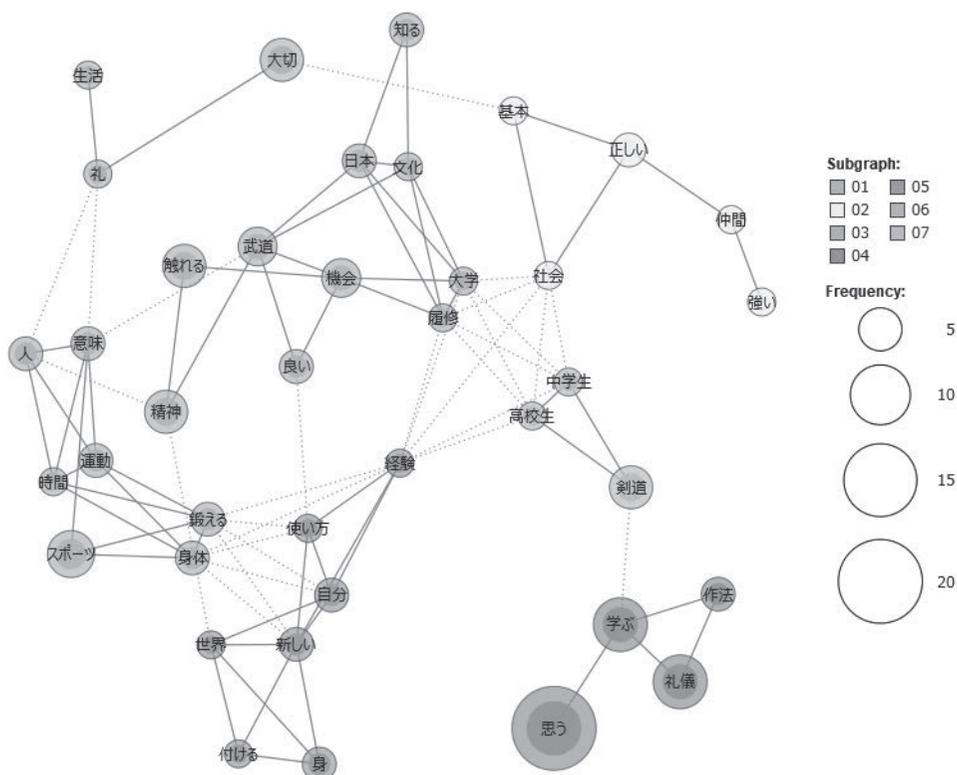


図4：大学で検討を履修する意味についての共起ネットワーク

5. まとめと考察

本研究では、テキストマイニングを用いて大学生の自由記述を分析し、大学生の剣道へのイメージを具体化することを試みた。その結果、剣道の経験者と未経験者でイメージの違いが顕著であることが明らかになった。しかしながら、剣道の授業を履修した時点から23名のうち、少なくとも9名は興味を持って剣道の授業を履修しており、テキストマイニングの結果を見ても否定的な言葉が少なくなっていた。最初からポジティブなイメージを持った学生たちが履修していることを考えると、結果に一定のバイアスがかかっていることが考えられるため、より一層のデータの収集が望まれる。また、授業を通したイメージの変容は顕著であり、剣道に対するイメージが良い方向に改善されていたと考えられる。こうした背景には、授業の中で経験者と未経験者の交流を取り入れたこと等が要因として挙げられる。今後は、学生たちの剣道に関するイメージを受けて、体育教員として剣道の指導を行うことを想定した授業を行うことで、指導者としての意識づけについて検証していきたい。剣道の授業のみでは、現在のような多様な生徒を抱える学校現場のことを理解し、個々の生徒に応じた指導を展開することは難しい。

そこで、関連した講義や演習等とも連携した学びを提案することで、学生の教員としての学びを深めていくことを目指したい。

今後は、学生の剣道のイメージに関するデータを積み重ねると共に、剣道の授業方法等へと続けて研究を行っていきたい。

引用文献

- 1) 長谷川智・坂上康博・木寺英史・鈴木智也『剣道の未来 人口増加と新たな飛躍のための提案』左文右武堂、2021年。
- 2) 大塚忠義「現代剣道の担い手に関する研究 その1—高校剣道部員の人口の推移に関する考察—」『高知大学教育学部研究報告 第2部』第44号、高知大学教育学部、1992年、pp.15-31。
- 3) 菊本智之・新保淳「中学校保健体育科における「剣道」授業の課題と「かた」を使った教材開発の意義」『教材開発学論集』第10号、愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教育学研究科共同教科開発学専攻、2022年、pp.69-79。
- 4) 平田佳弘・櫻間建樹・朝岡正雄「高校の授業実践を通して見える中学校における武道必修化の問題点」『環太平洋大学研究紀要』Vol.7、環太平洋大学、2013年、pp.249-257。
- 5) 平田佳弘・京林由季子「教職課程専攻大学生の剣道に対する意識—剣道授業の学習ニーズの分析—」『環太平洋大学紀要』第8号、環太平洋大学、2014年、pp.217-221。
- 6) 新里知佳野・古澤伸見・八木沢誠・軽部幸浩・藤原主一「大学剣道部員は剣道をどのように考えているか?—イメージ構造の比較—」『応用心理学研究』47(2)、日本応用心理学会、2021年、pp.126-127。
- 7) 新里知佳野・古澤伸見・八木沢誠・軽部幸浩・藤原主一「剣道に関するイメージ構造の分析的研究—剣道部学生と一般学生との比較—」『応用心理学研究』47(1)、日本応用心理学会、2021年、pp.1-11。
- 8) 小森富士登・武内政幸・飯田穎男・中島貅「本学学生の剣道に対するイメージの因子分析的研究—男子運動部員と非運動部員との比較—」『國士館大學武徳紀要』9、國士館大學武徳徳育研究所、1993年、pp.61-83。

A study on university students' image of martial arts – From student reports in a “Kendo” class –

Keiichi KUNIYOSHI
Yasuhiro FUJIWARA

This study attempts to clarify university students' image of martial arts. The participants were asked to express their honest opinions in open-ended reports in the first and the last Kendo classes. Text mining was used to analyze participant reports by sorting out frequent words and co-occurrence of the words. The responses to the four questions given to participants are the key to understanding how the students' image of martial arts have changed throughout the class.